
新しい風が吹いてきた

学 長 常 本 秀 幸

ここ数年間の中でも2004年は記憶に残る年になるのではないだろうか。1月の大雪、猛暑の夏、度重なる台風上陸、新潟・釧路沖の地震、そして12月の大雪と、地球が牙をむきだしたと言っても過言ではないほど自然現象の脅威が続いた。また、国際紛争、凶悪犯罪など暗い話が多い年でもあった。しかし、明るい話もある。オリンピック発祥の地、アテネで行われたオリンピックでは史上最多のメダル獲得で、日本中に興奮と感動の時間を与えてくれた。また、大リーグで活躍しているイチローは、ジョージ・シスラーが84年前に作った257本のこれまでのメジャーリーグ最多安打記録を塗り替え262本に伸ばした。

2002年に行われたサッカーのワールドカップの頃から感じているのが、若者の行動力に変化の兆しがあるように思える。目標が明確になったとき、それに向かって努力を続けるスポーツ選手など若者の姿は、次の時代に不安を感じなくても良いのかとさえ思える。まさに新しい風が吹き始めているのではないだろうか。

そのような2004年に、国立大学は明治以来の大改革と言われる国立大学法人としてスタートを切った。この法人化では、従来の文部科学省の管理下に置かれた護送船団方式を改め、法人ごとに単独航海することが求められている。しかも、その目的地までの海は荒波が予想されており、小型船ほど厳しい状況におかれていることは間違いない。本学はその小型船に属するが、この船を教職員の力を結集し、目的地に到着させるのが我々の責務であることは自覚している。ただ、今はまだ港内で船体整備をしている段階であり、まずは荒波に打ち碎かれない船体構造と機動性に富んだ走破能力・操縦性をこの1～2年の間に準備しなければならない。弱い部分を補強し、老朽化した部分を取り替えるなど大改装が必要である。

船体を調べてみると弱い部分の一つに研究力があることがわかった。

教育力が船体だとすると研究力は動力源になる。研究成果という出力がなければ船は進まないが、現状では出力不足と言わざるを得ない。出力を高めるためには供給燃料を増やすことになるが、効率良く燃焼が進むよう、教員に評価制度や任期制などを導入している。そんな中、従来、年2回附属図書館で発行している「研究報告」誌を改め、外部からも応募が可能な論文誌として発刊することが附属図書館委員会から提案された。これは、人文社会科学系の一部の分野は投稿誌に限られており、定期的な研究成果の発表が難しいためである。いざ出版となると学外査続の方法、費用負担あるいは掲載論文数など解決すべき問題も多かったようだが、附属図書館委員会が中心となって学科等間の意見調整が行われ、今回「人間科学研究」創刊号として刊行されることになった。研究論文誌として認知されるまでには時間を要するが、努力を重ねれば可能であると確信している。大学としても支援を惜しまないが、質の向上が鍵を握っているので関係者の奮起を期待したい。

法人化の目標は、国立大学が世界最高水準の教育研究機関として社会から高く評価され、且つ、日本の未来の活力を作り出す人材を多く輩出することである。法人化が向かい風だと思っていると先に進まない。追い風として利用すれば良いのではないだろうか。今回、共通講座が研究面で出力増大の方向性を出してくれたのは、まさに追い風の考え方だと思う。このような発想の転換が、色々な部分で起こることが荒波に立ち向かう力になる。

「新しい風が吹いてきた」と題を付けたのは、追い風のことでなく、今回のように学内に発想の転換など意識変革を伴った新しい風が吹き始めているのが感じられるからである。この論文誌が近い将来高く評価される論文誌になることを願い、また、皆さんに次の新しい風を作り出してもらうことを願って巻頭言の締めくくりとしたい。
